リレーエッセイ

若者へのメッセージ㊺

紙工芸家（寄席紙切り）　林家　今丸

【第一回】出逢いは、道をひらく

出逢いは「あみだくじ」、思わぬ人に出逢える楽しみがある。私をあたたかく芸界へと背中を押してくださった多くの恩人の方々がいる。さらに、芸界へ進んだその先に海外への道がひらかれて多くの出逢いが生まれた。お客さまの「笑顔と拍手」が何よりのご祝儀だと思っている。

好きな道に入る

中国の詩聖、杜甫（七一二～七七〇年）の詩に、「切り絵は、わが心の魂」の一節がある。私はその切り絵、寄席の芸で知られる「紙切り」に携わり六十年余りになる。

この芸が知られるようになったのは、戦後テレビ放送が始まり、番組で「シルエットクイズ」に取り上げられたのが契機である。当初、番組から紙切り・小倉一晃氏へ出演の依頼があったが、小倉氏は出演を断り、そのため初代正楽に番組の依頼が回った経緯がある。放送が始まると「紙切り芸」と「正楽」の名が世に知られるようになった。正楽の名は大阪ゆかりの落語家名で、以来、落語家・桂才賀は「紙切り・林家正楽」を名乗ることになり、この正楽をはじめ、関東大震災後に、大阪落語と共に文治、小文治、小南、圓馬などの名跡が関東のものとなった。

自分の選択を信じて

私は、昭和35年の夏頃、伝手を得て正楽師に

林家　今丸（はやしや・いままる）

公益社団法人落語芸術協会会員

1960年　初代林家正楽に入門。林家正枝を名乗る。

1966年　正楽没後五代目古今亭今輔の門下となり、林家今丸と改名。寄席を中心に国内外で公演と指導をする。

1984年　銀座・松屋「遊びのギャラリー」にて個展開催

1985年～89年　「週刊読売」の時事批評「ブラックorホワイト」にて切り絵連載

2010年　小学館『柳家喬太郎　江戸料理平らげて一席』切り絵掲載

2011年　外務省招聘公演（サウジアラビア、カタール、ヨルダン）、英国公演（ロンドン大学、ケンブリッジ大学、Roding Valley High School他）

2017年　カナダ大使館招聘「オタワ日本祭り」およびモントリオール、トロントにて公演

2018年　東京都主催「江戸キラリプロジェクト」、東京オリンピック・パラリンピックの広報に寄与する活動で、10月29日から11月3日まで「パレ　ブロンニャール（旧証券取引所）」、「Les Halles」にて、パリ公演「アトリエブラマントー」にてワークショップ同時開催

2018年　「外務省「文化人・団体推薦リスト」に掲載

2020年　政府海外広報「Hilighting Japan」3月号の冊子および電子版、PDF版、HTF版に掲載

2020年　「日本博寄席2020」（主催：文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会）出演

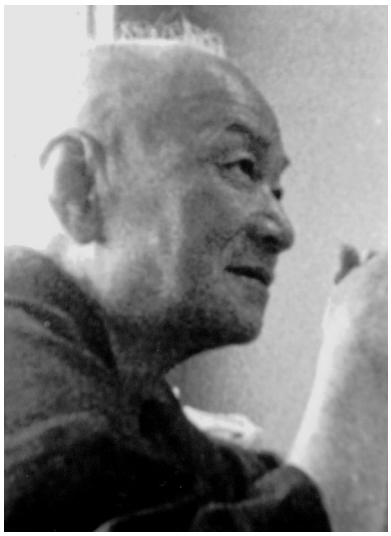
著作　1990～2020年：小学館発行「サライ」各特集号（「そば」、「江戸の洒落、上方の笑い」「大道芸・口上集」、「シャーロック　ホームズ」「宮沢賢治」）および2006年：「サライの銀座散歩」の表紙制作。小学館発刊・書籍「柳家喬太郎　江戸料理平らげて一席」全ページの挿絵制作

指導歴など　1966年より現在まで、国内外で学校、美術館、文化センター等で指導。海外では、英語、フランス語にて指導。

入門することになった。正楽師の切った作品は、鋏の手数は多いが情緒と味わいがある。当時、五年先輩に小正楽（二代目正楽）がいた。師匠は私に、「君は、自分の好きな切り方でよいから、金屏風の前で演じるような品位のある芸をするように」との言葉をくださった。

正楽の名を継いだ二代目・三代目は、初代の形を踏襲したが、私は師匠の精神を継ぎながら、形の表現と切り方は、デッサンや絵を習っていたこともあって、絵描きだった小倉氏の簡潔で線がきれいな切り方を選んだ。

初代林家正楽師匠



五代目古今亭今輔師匠

当時師匠から「海外要人の宴席で演じた時、通訳が間に入るのでやりにくかった」と伺っていた。東京オリンピックの開催が決まった頃で、一層英語を必要とする宴席や催事の仕事が多くなることを考えて、私は千駄ヶ谷駅前にある津田英語会で英会話を学ぶことにした。この選択は正しかったと思う。その後、五十年以上、いまだに英語を必要とする国内外の公演依頼が多く来ている。

入門五年後の春に正楽師が病で没したため、同年秋頃、五代目古今亭今輔師匠の一門に加えていただき、翌年から人形町・末広亭の高座に出演することになった。

今輔師匠は、人情に厚く、高座での心構えを懇切に教えてくださった。師匠夫妻は私どもの結婚に仲人を務めてくださり、十年余り師事した尊敬する方である。

素敵な方々に出逢えて

父は落語家時代（昭和四年から二十二年頃）に、四代目・柳家小さん師匠宅に度々伺っていて、師匠の妹・大野祇篝先生を知ることとなった。先生は、仏教、神道、古事来歴に通暁し、伝統芸能（舞踊・歌舞伎・能・狂言・寄席芸など）に明解な見方をお持ちで、品性高く凛とした方だった。人間として大切なことや人生における多くの助言と共に、芸界へと私の背中を押してくださった。

私を導いてくださったもうお一人は、美術、仏教（禅）などに造詣の深かった片山鉄之助氏である。

氏は座禅を実践し、多くのことを教えていただいた。片山氏は、長きにわたる禅への傾倒と座禅の実践を経て、正にとらわれないものの見方「観自在」の心を持った、人生の師であった。

三十代初め頃、片山氏からイタリアに行くことを勧められ、ミラノ滞在を決めた経緯がある。その時は、霞が関の国立教育会館でイタリア語を学び、ミラノ滞在中は各地の美術館や教会を訪ねた。

さらに翌年には、フランス滞在の機会があり、東京・日仏学院で、フランス語を学び渡仏した。

現地では、アリアンス・フランセーズ・パリに通い、折に触れ各地の美術館を訪ね巡った。

四十代半ば、再度日仏学院でフランス語を学び、六十代初めに再び渡仏。各地の美術館を訪ね、旧友と再会し、会話についても自信を得た。

二〇〇六年には、パリ日本文化会館において「パリ寄席」が実現。桂歌丸、三笑亭茶楽両師との公演をフランス語で演じて好評を博した。人との出合い、語学との出会いは、人生を豊かにする。